

府立かわち野高等学校の取組み

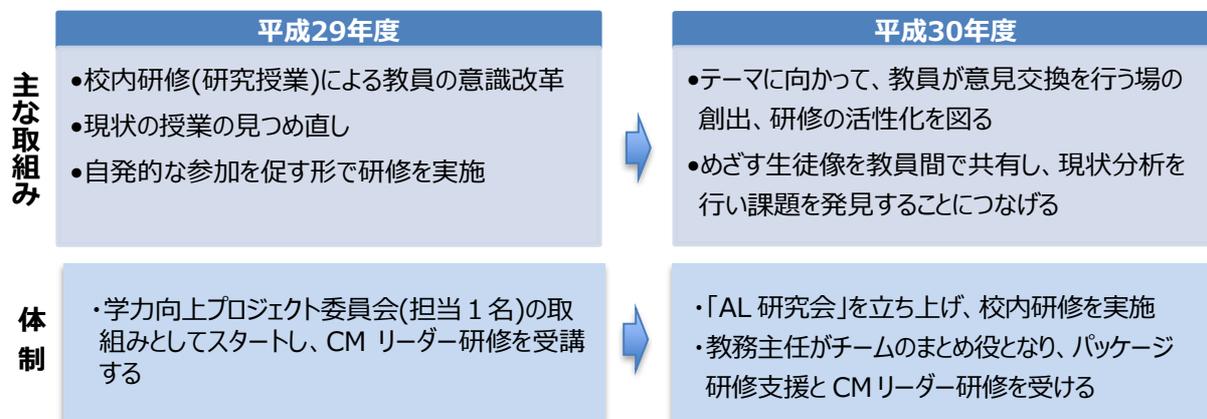
(1) 学校教育目標(めざす生徒像)

「夢や希望をかなえる学校」「安全で安心な学校」「地域に根ざし信頼され愛される学校」

- 多様な個性をもつ生徒一人ひとりの可能性を伸ばし、「社会を生き抜く力」を身に付けるための基になる「確かな学力」を育む。
- 安全で安心な学びの場で、思いやりと感謝の気持ちを大切に、互いに認め合い尊重しあう「豊かな心」を育む。
- 厳しさの中にも、やさしさ・温かみのある丁寧な指導を通して、規範意識や自尊感情を高め、「自ら学び、自ら考え、主体的に判断し行動する力」を育む。

(2) 主な取組みと組織体制の準備

- テーマ…「主体的・対話的で深い学び」の視点での授業力向上



※「アクティブ・ラーニング」を「AL」と標記している。

(3) 主な実践とその工夫

① 生徒たちがアクティブに学ぶ前に、教員がアクティブに学ぶ

平成30年度に「AL 研究会」を立ち上げました。「めざす学校像や育みたい生徒の力を具体化し、教育活動につなげていくためには、教員の共通理解を深め、未来を描きながら語る場の創出が必要である。そのためにも魅力的な校内研修を計画して参加率を高め、活性化を図りたい。」との管理職やリーダーの考えからです。

そして、目標を

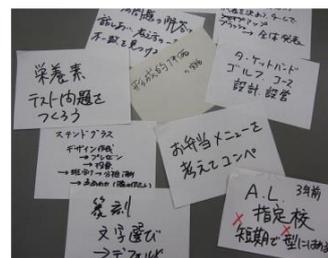
- 学習者主体の授業への転換の本質やその必要性を理解すること
- 各教員がその実践者となること

とし、研究会の運営、校内研修、研究授業の中に参加型ワークショップの手法を埋め込みながら、まずは教員自身が「主体的・対話的で深い学び」とはどのような学びなのかを体験し、学ぶことにしました。

■ 6月12日(火) 研究会第1回ミーティング

「AL」とは何か?という率直な疑問がメンバーから出されたことを発端に、それぞれの教育実践の中から「生徒の主体的な学びを促進し、より深く学ばせた例」を出し合うブレインストーミングを実施。

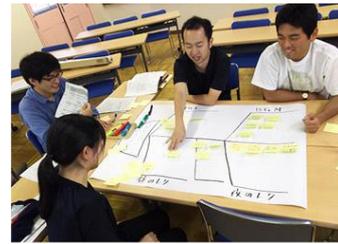
意見交換する中で、現在行っている授業の中で、ALを意識した課題提示の方法、問かけの工夫などを行うことにより、生徒の活動が主体的で対話的なものになることが理解され、だからこそ教員の意識改革と工夫が必要であることが確認されました。



■ 7月5日(木) 研究会第2回ミーティング

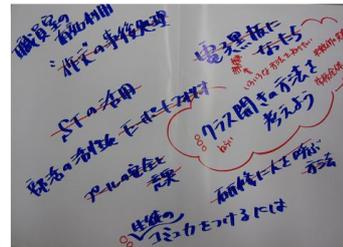
2学期実施予定の校内全体研修会に向けて、その中で使用予定のシンキングツールの1つ、フィッシュボーン図を使って、「海のキャンプ」と「山のキャンプ」を各グループで企画するという内容でグループワークを実施。

投げかけるテーマを変えることで、各自が持っているアイデアや知識を出し合う活動への展開幅が大きいことを確認しました。



■ 7月31日(火) 研究会第3回ミーティング

前回体験したフィッシュボーン図を校内全体研修会で使用するにあたり、どんなテーマで話し合うのがよいのか、ブレインストーミングで出しました。なぜそのアイデアを出したのかを各自が説明する中で、本校の抱えている現在の課題(学力向上への取り組み改善、生徒のコミュニケーション力の育成など)も見えてきました。最終的に、生徒が新たな気持ちで学年を始める4月のホームルーム計画は改善の必要性が高く、他の課題解決への糸口にもつながるという意見から「クラス開きの方法を考えよう」に決定しました。



■ 9月5日(水) 校内研修(全体会)

「クラス開き」をテーマにしたことで、どんな経験年数の人も話しやすくなりました。学級経営は経験の少ない先生が一番悩むところです。そして経験の長い先生方は、自分の実践を語りやすい。ここに先生同士が聞き合い学び合う雰囲気は自然と生まれました。そして、話題はいつの間にかここ数年のかわち野高生の変化へと移り、「自己紹介が苦手になってきている」「自己開示ができるようになって欲しい」、「人間関係をつくる力をつけてあげたい」という風に、生徒に付けたい力へと変わっていきました。ALの必要性を自ずと認識する機会がここに生まれました。



■ 10月5日(金) 研究授業、研究協議数学Ⅱ(2年)

「シンキングツールを活用した学び合いの授業」

「生徒が校内研修で取り上げたフィッシュボーン図を活用して、グループに与えられた数学の問題の解答を整理し、解き方や考え方をまとめ、説明する」という場面を公開授業とし、シンキングツールを授業でどのように用いるとよいかを示しました。

研究協議では、拡大した指導案を用いて、授業の流れの中で「生徒はどのように学んでいたか」を中心に振り返りを行いました。



参加型ワークショップの様々な手法を用いて、リラックスした雰囲気の中で意見を出し合い、共有・検討する。会議や議論の進め方を学ぶ。一連の過程の中で、議論が深まっていくことを実感し、今学校で求められているのはどのような質の学び合いなのか、それを実現するためにはどのような工夫が必要なのか、教員間で認識を深めることができました。

「すでにホームルーム活動や授業に『主体的・対話的で深い学び』を意識して独自の展開を実践した教員もおり、教員自身が『おもしろい、やってみたい』と感じて自発的に授業実践研究に取り組んでいく、『タネ蒔き』の1年になったのではないかと感じています。また、AL研究会の活動をきっかけにして教員間のコミュニケーションが円滑になり、授業改善はもちろん、クラスづくりや教員間の新たな動きへの確実な一歩となっています。」とリーダーは語っています。

② 研究授業の実践から、生徒の主体的な学びに向かう変化を見取る

授業参観者から、「生徒全員が役割を果たし、授業に参加していた。」「普段は寡黙な生徒がリーダーに任命され、覚悟を決めて本当に熱心に説明していた。」「授業者は日頃の観察から、生徒同士の人間関係、得意なこと、苦手な面などを考えた上で、個々にチャレンジして欲しいこと、伸ばしたい視点をもってグループ組みをしている。グループワークを通しての生徒の成長や“化学変化”が見えてとてもおもしろい。」との感想が上がりました。